

第七回

いわた俳句大会 入賞作品集

主催
いわた俳句大会実行委員会

目次

ごあいさつ	1
大会選者	2
一般の部	4
中学生の部	10
小学生の部	16

ごあいさつ

「第七回いわた俳句大会」にご投句下さり誠にありがとうございました。

当初、ご立派な選者の先生方をお迎えしてワークショップピア磐田での大会を予定し準備を進めて参りました。しかし、昨年続き新型コロナウイルス（オミクロン株）感染症急拡大を受け中止せざるを得なく残念でなりません。皆様には、この作品集をもってご容赦下さいますようお願い申し上げます。

ところで、人は生きていく以上感情というものに多かれ少なかれ左右されます。「作句はまず客観視しなさい」と教えられました。しかし、私など感情にどっぷり溺れた句を作り自己満足したり。

さて、今回をもって、いわた俳句大会の選者をご退任される宇多喜代子先生から実行委員会に短冊を頂戴しました。

もの多き机上すこやか年はじめ 喜代子

誰もが経験しているお正月の家の風景、しかしこれが見事な俳句になる驚き。客観的にお詠みになっているのにその空気、新春のすがすがしさすべてが伝わって参ります。さすが宇多先生と感銘致しました。先生の気取らないお人柄の良さと俳句の品格に敬意を表しました。そして、これまでのご指導に心より感謝申し上げます。

いわた俳句大会は継続して参ります。どうぞ、今後ともよろしくご協力を賜りますようお願い申し上げます。

いわた俳句大会実行委員会 委員長 青島美子

大会選者



宇多喜代子 先生

山口県出身。現代俳句協会 特別顧問

2001年 第35回蛇笏賞、2002年 紫綬褒章

2019年 文化功労者

著書は、句集「象」、「記憶」、「森へ」など多数



岸本尚毅 先生

岡山県出身。俳誌「天為」「秀」同人

1993年第16回俳人協会新人賞、2009年第23回俳人協会

評論新人賞、2012年第26回俳人協会評論賞

著書は、句集「舜」、評論集「俳句の力学」、

評論集「高浜虚子 俳句の力」など多数



高柳克弘 先生

静岡県出身。俳誌「鷹」編集長

2008年 第22回俳人協会評論新人賞、

2010年 第1回田中裕明賞

著書は、句集「未踏」、評論集「究極の俳句」など多数

2022年4月から「NHK俳句」選者。中日俳壇選者

いわた俳句大会

入賞作品



一般の部

宇多 喜代子 選

特選

雁渡し今朝は墨絵となりし富士

石原ひろみ

(句評)

「雁渡し」は秋のはじめの頃に吹く北風のこと。この頃に雁が渡ってくるところからの風の名。伊豆あたりの漁師さんの言葉とのこと、富士の見えるところにお住まいの作者には親しみのある風の名であり、ああ、秋だなあという気分からの作句だったのでろう。日々風情を变える富士山を「墨絵となりし」ととらえて断定したところがよかった。「墨絵のような」ではつまらなくなる。

秀逸

十月や鳥の集まる御神木 牧野圭子

(句評)

陰曆十月は神無月。神社の神様は出雲にお出かけでお留守。そのことを知っていたかのように境内のご神木に鳥が集まって楽しんでる。このご神木、たぶん鳥たちが常々から埒わづらにしている木なのだろう。

秋の初風少年の喉仏 林 浩世

(句評)

五七五定型ではなく、「秋の初風」「少年の喉仏」の二節からなる句。「秋の初風」とは秋のはじめに吹く微風のこと。この二節は直接には無関係だが、大人びてきた少年と初秋の爽やかさがうまく重なる。

入選

羽織り着て老の餅まく在祭 鈴木克佳

家康の敗走の地や青蜜柑 村松道夫

萩の風その先もつれてをりにけり 浅野数方

一灯に闇の深まる秋祭 齋藤文子

虫送り果て零れ火の匂ひけり 大村泰子

細胞の煌煌として鬼踊 川口八重子

ずんずんと呼吸束ねし鬼踊 金子典子

一般の部

岸本尚毅 選

特選 無蓋貨車又無蓋貨車吾亦紅

砂間達也

(句評)

長い編成の貨物列車がゆく。その様子を「無蓋貨車又無蓋貨車」で具体的に描写した。動詞は使われていないが「又」の一字で、目の前を次々に貨車が過ぎてゆく様子が想像される。下五は点景の吾亦紅。貨車がゆくのが秋の野原であることがわかる。手前の景が吾亦紅で、その向うを列車が行くのである。無駄な言葉はなく、しかも、表現に詰屈なところもない。すぐれた叙景句である。

秀逸

入選

Googleに草の名を問ふ子規忌かな

高島昭子

パリを見し帽子を斜に案山子翁

山田泰久

(句評)

病床にあった子規は身近な草花を愛し、句に詠んだり絵に描いたりした。グーグルはお手軽だが、子規だったらきつと活用しただろうと思いつつ、子規忌に子規を偲んでいる。

霊山の長ききざはし穴惑ひ

西田躬穂

蚯蚓鳴く風と海だけある故郷

石原ひろみ

人臭きすがりの笑の鬼踊

喜多周子

測量の杭打つ音や鮎落つる

渥美絹代

鶏頭花鎖を長く小屋の犬

寺田佳代子

(句評)

磐田市ご当地の句。腰蓑を模した「すがりの蓑」というものがあって、それが「人臭き」というのである。発想が面白い。「鬼踊」の「鬼」を踏まえて「人臭き」といったのかもしれない。

秋祭なき夜の母と長電話

西澤寿江

耳鳴りは昭和の木霊鬼をどり

中川正男

一般の部

高柳克弘 選

特選 沢蟹と話す自分を好きになる

永井千恵子

(句評)

歌人の穂村弘さんのエッセイに、道端でかがみこんでいる人に理由を聞いて、「コンタクトを探しているんです」といえば納得されるが「テントウムシを探しているんです」という答えだとびっくりされる、という話がありました。沢蟹と話しているのって、日常的にちよつとへんな感覚。でもそのへんなところが、詩人の資質でもあるんですね。自分のちよつとへんなところに、日常とは別のものさしをあてることができる、人生はより豊かになるでしょう。

秀逸

姉妹とは良きもの苞にマスカット 原美香子

(句評)

「苞」とは、おみやげのこと。姉妹同士、往来があつて、今回はおみやげにマスカットを持って行ったというのです。おみやげの中身は草餅でも林檎でもいいのですが「マスカット」の語感が洒落ていて、すがすがしい読後感でした。

ふるさとの小さな山や栗おこは 武村光隆

(句評)

富士山が立派な山なのはいうまでもありませんが、誰にも知られていない郷里の小さな山だって、作者にとつては誇りなのですね。「栗おこは」という季語がとても良かったです。素朴で、あたたかみがあつて、帰るとほつとする郷里だと伝わります。

入選

柵田刈る媼の御居処空へ向く 山田泰久

里祭切つた張つたの芝居観に 奥野津矢子

この杉はここに千年祭笛 神谷知恵子

パソコンの文字化け秋の蚊の過る 鈴木齊夫

唾蟬の私のひと日生まれり 久田洋子

月の道家の灯遠くペダルこぐ 金子由美子

アセチレンガスの臭いの村祭 宮澤次男

中学生の部

宇多 喜代子 選

特選 日本一大きな山が雪被る

須山涼太

(句評)

日常会話で言うなら「富士山に雪が降ったね」「初冠雪だよ」と言うことで終わりだろうが、あらためて「日本一大きな山」と言ってみた。誰もが「富士山」だと思っただろうが、これは違う。たとえば実在の富士山を見たことのない人、富士山の存在を知らない人たちにとっての「日本一大きな山」が即ち「富士山」だとは限らないからだ。この句の面白さはそこにある。富士山に遠い在所の裏山だって「日本一大きな山」になることがあるのだ。

秀逸

入選

秒針もまったり動く春の午後 安間乃々華

父親のいびきに混じり入る秋の声 松下莉子

(句評)

のどかな春の午後、なにもかもがゆっくりと、まろやかに感じられる。その感じを「まったり」という言葉で表現した句。コチコチと時を刻む秒針までが「まったり」と感じられる。そんな春の午後である。

春霖にうたれて思うもう無理です 盛煌太郎

富士山とからつと乾く冬の風 寺師 彩

父親と目線が同じになった春 高塚日那汰

(句評)

中学生時代、何かにつけて父親と目線が違うことがある。いわば大人と大人になりかけの目線の違いだ。それがこの春、ふっと「同じだ」と思うことがあったのだ。そうして次第に父親と同じ大人になってゆく。

寒い朝真つ白な窓からのあかり 大石心桜

妹をねたましく思う雛あられ 宮本悠史

刈りとった稲の金色夕日色 久留島悠大

いつの日か飲んでみたいな生ビール 卷田智哉

中学生の部

岸本尚毅 選

特選 暑き日に踊る壁見ていとおかし

山口翔太郎

(句評)

「暑き日に踊る」「壁見ていとおかし」と分けて読むものと解した。暑い日に何かの踊の稽古をしているのか。壁に相對して一心に踊っているそんな己の姿(仲間の姿)が「いとおかし」と感じられた。「いとおかし」は枕草子でよく知られる、機知の伴った洗練された可笑しみの感覚だが、そんな言葉を暑い日に踊ることに対して用いたのがユーモラス。

秀逸

入選

秋深し「さよなら」の手の長い影

太田 結

春霖にうたれて思うもう無理です

盛煌太郎

(句評)

晩秋の夕暮れだろうか。さよなら、と手を振る。その手の影が長い。景自体は典型的な秋の夕暮ではあるが、手の影をクローズアップしたところが新鮮。

我学ぶその先一つ早星

名倉実来

妹をねたましく思う雛あられ

宮本悠史

田にぼつりかかしたつてると子が笑う

酒井亜優美

ある日の朝悲しみ表す秋の雲

武井陽菜

レシーブが瞬き許さずしみる汗

高塚日那汰

(句評)

「子が笑う」とある。その子どもは小さい子どもである。う。「田にぼつりかかしたつてると」という言葉が、小さい子どもの口から発せられていることを、作者は面白がっているのだろう。

かめの足意外と速い春の土

寺師 彩

桜ふり空山霞春が来る

竹原真央

中学生の部

高柳克弘 選

特選 我学ぶその先一つ早星

名倉実来

(句評)

「早星」とは、炎天続きの夏にふさわしい、真つ赤な星のこと。具体的には、さそり座のアントレスをさします。作者は夜遅くまで勉強を続けているのでしよう。そのとき、ふつと見上げた窓に、赤い星が輝いていたわけです。学ぶということの苦しさは、「早星」に象徴されているようです。俳句は、短歌に比べて、甘さを排した、非情の文芸と言われますが、まさにこの句は正統派の俳句といってよいでしょう。

秀逸

春霖にうたれて思うもう無理です

盛煌太郎

(句評)

「春霖」とは、春の長雨のこと。降り続く雨に、もういい加減にしてほしい、という気持ちなのでしょう。「春霖」という古めかしい季語と、「もう無理です」という、ふだん遣いの言葉で書かれたつぶやきとが、面白く一句の中でマッチしています。

夏休みフラペチーノで今どき女子

伊藤心優

(句評)

おしゃれな喫茶店に行くとメニューに出てくる「フラペチーノ」。日本語ばなれしたその名前だけで、非日常の気分を醸し出してくれますね。まさに、「今どき」の夏休みの句で、新鮮でした。

入選

逃げ出した真夏の朝の秘密基地

伊藤瀬菜

帰り道冷えた小銭で買うしるこ

高木夏実

水無月や汚れた体におかえりと

大庭結心

ちゅうぶらりんきみも一人の糞虫か

浪崎琥央

音上げぬ紅葉のそばの室外機

永井風雅

古き良きうちわあおいで秋刀魚焼く

久保田真衣

爆速でアイス消えゆく冷凍庫

市川こはる

小学生の部

宇多 喜代子 選

特選 ぼくのせよりもっと大きいすすきの葉 岡田 隼

(句評)

ぼくはもう四年生だから、背も高くなったと思っていたのだけど、すすきのほうがもっと高かった、そんな発見が句になりました。発見には大発見もあれば小さい発見もあります。すすきが丈の高い植物であることは誰もが知っている当たり前のことだけれど、ぼくにとてもは大発見だったのです。そんな自分の発見、あれっと思ったこと、そうだったんだ、と気づいたこと、それを俳句にしておく、大人になった時のいい思い出になります。

秀逸

入選

かぶとむしるすばんのときいつしよだよ

土性拓真

四対一秋の土曜日ジュビロ勝つ

左口京佳

(句評)

一人で留守番をするのは、なんだか心細い。そんな時、飼っている「かぶとむし」がいろいろ話し相手になります。何といってもかぶとむしは強そうだし、何かがあった時、助けてくれそうです。

ひがんばな川の近くにさいている

稲木愛七

どんぐりは秋になるたびおちている

松下琉璃

めずらしいベッコウトンボ会ってみたい

石田衣菜

光から闇になるときもう六時

青島倅大

紅葉ちり月にかかるよ木の一部

辻 悠亜

(句評)

「光」と「闇」という二つの言葉で明るい昼間から夕方になり、しだいに暗くなつてゆく微妙なときがうまく表現されています。「もう六時」の「もう」にびっくりした様子がよく出ている句です。

お祭りは中止になつても秋は来る

高林よう太

夕暮れに夕日に似てる赤トンボ

乗松瑞葵

小学生の部

岸本尚毅 選

特選 四対一秋の土曜日ジュビロ勝つ

左口京佳

(句評)

ある秋の土曜日、Jリーグの試合で磐田ジュビロが勝った。そのスコアは「四対一」の快勝であった。句は事実をたんたんとして叙しているだけのようであるが、応援するチームの勝利を喜ぶ気持ちがいっしょに伝わって来る。文字通り気持ちのよい「秋の土曜日」なのだ。かなり複雑な内容の句であるが、五七五の形にうまくおさめた。

秀逸

シタシタと息を合わせて屋台引く

浅倉亮太郎

入選

秋刀魚売り見附の町にやってくる

松村寛亮

(句評)

磐田市の地元の祭を詠んだ作品であろうか。「屋台引く」とあるので季語は祭。「シタシタ」というオノマトペが、屋台を引く人々の緊張感や高揚感をよく伝える。

かぶとむしるすばんのときいつしよだよ

土性拓真

ひらひらと桜の花びら白飯に

松坂祥太郎

お母さん私はカイロじゃないよ

高橋千月

(句評)

指先が冷えたお母さんが、子どもに触って手を温めようとする。子どもは温かいのだ。子どもは「私はカイロじゃないよ」と少し迷惑そう。親子の情愛が感じられる。カイロが冬の季語。

どんぐりをつぶしてありにあげたいな

土井千春

運動会声援無いが走り抜く

伊藤大貴

上を見てトンボいっぱいおけがやぬま

永田虎翔

ハロウィンだアメをゲットだこわがらせろ

鈴木結人

小学生の部

高柳克弘 選

特選 かれていく理科で育てたヘチマ達

浅井奏都

(句評)

理科の観察実験で、種から育てたのでしょ。長く一緒の時を過ごしたヘチマが枯れてしまうのは、なんだか友達との別れのように物悲しいですね。「達」は、一般に、人をあらわす名詞や代名詞につきます。ここで「ヘチマ達」という表現を使っていることで、ヘチマを自分たちの仲間のように思っていることが、さりげなくあらわされていますね。そこがうまいと思いました。

秀逸

おばけたち。プール見学ひっそりと

水野琥央

(句評)

学校の怪談でおなじみ、プールに住んでいるおばけ。でもこの句のおばけは、こわいというより、親しみ深い感じ。子供たちがうらやましくて、遠巻きに見ているのかもしれないね。おばけだって、学校の仲間なんだよなあと、この句に気づかされました。

光つてみ電球のようにゆりの花

藤田尚季

(句評)

この句から想像したのは、ゆりの花のつぼみ。なるほど、どこか電球に似ているかも。「光つてみ」は、光つてみよ、ということ。作者がゆりと心を通わせている証である、この呼びかけの言葉が、句をいきいきさせています。

入選

お祭りで光るリングは必じゅ品

青島奏汰

どんぐりがおちたさきにはわたしのて

浅井香帆

わたあめを食べるとサンタになれるんだ

堀田葉月

月曜日ラムネのふたが公園に

中村真衣呂

画家気分秋の風景描いてく

國京愛華

おじいちゃん祭りのお酒待ち遠しい

菊地恵莉奈

石みたいぼうがおれたやすいかわり

廣谷悠太

発行日 令和四年二月十八日（金）

編集・発行 いわた俳句大会実行委員会

問い合わせ先 いわた俳句大会実行委員会事務局

（磐田市教育委員会事務局教育部教育総務課）

静岡県磐田市国府台三十一

〒438-8650

TEL〇五三八―三七―四八二一